

9. グルコース負荷 FDG-PET による虚血心筋の評価 —²⁰¹Tl-SPECT および Cine MRI との対比—

小野 恵 高橋 恒男 吉岡 邦浩
柳澤 融 (岩手医大・放)
世良耕一郎 篠野健太郎 佐々木敏秋
(同・サイクロセ)
盛合 直樹 中居 賢司 平盛 勝彦
(同・二内)

グルコース 75 g 負荷時の FDG-PET 心筋病変所見と、²⁰¹Tl-SPECT イメージおよび、MRI イメージとの対比検討を行った。対象症例は 4 例で、多くは対枝病変例であった。虚血～梗塞領域は、FDG 集積低下～欠損として描出され、²⁰¹Tl-SPECT イメージと、ほぼ類似した。MRI においては、壁運動性の低下、心筋の Gd-DTPA での造影効果など、心筋病変の客観的評価にいくつかの情報が得られた。糖尿病合併例では、インスリンによる血糖値のコントロールが必要と考えられた。

以上これらは、視覚的定性的検討にとどまったが、今後定量化が必要と考えられた。

10. 心臓核医学検査で心以外に異常所見が見つかった症例について

本間 次男 安久津 徹 駒谷 昭夫
山口 昂一 (山形大・放)

1989 年から 1992 年までの 4 年間に、山形大学医学部附属病院において、²⁰¹Tl または ^{99m}Tc を用いた心臓核医学検査を施行した患者で、心以外に異常所見が指摘された 5 症例 (甲状腺癌・乳癌・腺腫様甲状腺腫・肺癌・胸膜炎) について、他の検査所見を追跡し、読影上の留意点を検討した。

²⁰¹Tl 心筋 scintigram では、腫瘍 scintigram としての側面にも留意すべきであった。

心臓を関心領域の中心として再構成された画像のみならず、その原画像と処理過程にも注意を払うべきであった。

11. 因子分析を用いた肝胆道シンチグラフィの定量的評価について

永尾 一彦 加藤千恵次 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古舘 正從
(北大・核)

^{99m}Tc-PMT を用いて肝胆道シンチグラフィを施行し、そのダイナミックデータを用いて、肝胆道系の因子分析に適した条件と、定量評価の可能性を検討した。肝成分を分離するには心や腸管の因子をあらかじめマスク処理にて除外するのが望ましく、また因子数 3 以上では分離した各相の成分が症例により一定していない点から、2 因子が最も評価しやすかった。対象症例中に強い肝障害例はなかったが、いずれの場合も早期のピークをもち、しだいに下降する成分と、より遅く出現する成分に分離され、それぞれ肝と胆のう胆道系成分と考えられた。肝成分に対応するカーブのピーク出現は ROI 法でのピークより早く、肝実質成分をより反映している可能性がある。

12. 定常腎盂内圧尿流量測定法の臨床応用

伊藤 和夫 古舘 正從 (北大・核)
山下 哲史 野々村克也 (同・泌)
松野 正 (北海道泌尿器科記念病院)

本検査法に関しては昨年度の学会で基礎的検討結果と小数例での臨床データに関して報告した。今回は臨床例 16 例 20 腎に関する結果を報告する。方法は前回の学会報告に準じて行った。whitaker テストおよび腎瘻造影で尿管閉塞なしと診断された 16 例中 12 例 (2 例は体動のため失敗) では、腎盂内圧上昇に伴い尿流量が直線的に増加した。腎盂内圧上昇でも尿通過が示されなかった 2 例は whitaker テストでも閉塞が確認され、1 例は尿管再建術、他の 1 例は本検査のデータから腎瘻設置による治療が行われた。本検査は侵襲的方法であるが、生理的状态での尿流量計測が可能で、水腎症での尿管閉塞の鑑別診断法として今後期待できる方法である。